

中国古代の交通路と泰山調査記

藤田 勝久

はじめに

山東省の泰山は、自然と文化が融合した史跡をふくむ世界遺産である。この地域は、新石器時代の文化遺跡が豊富で、泰山は春秋・戦国時代に魯国と斉国の境界にあったが、秦代では始皇帝の封禪と、前漢の武帝の封禪が有名である。封禪とは、泰山で天を祀り、ふもとの梁父で地を祀る儀式を行うものであるが、武帝の巡行には『史記』を著した司馬遷も随行している⁽¹⁾。これらの巡行は、西安市の方面から東方に向かっており、皇帝の封禪は後漢時代や、唐代、北宋時代にも受け継がれている。

一方、民間では自然神としての崇拜から、やがて東嶽大帝という泰山の神が祀られ、北宋時代には碧霞元君の廟を創建し、明代にその信仰が盛んになったといわれる⁽²⁾。こうした皇帝の巡行と、庶民の信仰は、古代の交通路と人びとの移動にも関連している。

私と矢澤知行氏（愛媛大学教育学部）は、2008年12月8日～15日に済南から泰安、泰山、曲阜、臨沂、連雲港の交通路と史跡の調査をおこなった。私の担当は、泰山とその周辺交通について考え、あわせて古代における泰山信仰の意義を整理することである。また臨沂と連雲港では、漢代の出土資料を参観したが、ここにも交通路と旅行に関する内容をふくんでいる。以下に、簡単な調査報告を記して、泰山をめぐる華北の特色を知る手がかりにしたいとおもう。

1、調査日程と古代の交通ルート

今回の調査は、つぎのような日程でおこなった。12月8日に、松山空港から上海に到着。上海で復旦大学を訪問し、その日の夜行列車で済南に向かう。車中泊。

9日の早朝、済南市に到着。午前、山東省博物館と市博物館で地域の文物を参観する。午後、バスで泰安市に移動した。暗くなるまで岱廟を参観。ここから泰山を望むことができるが、あいにく見晴らしは悪かった。泰安泊。

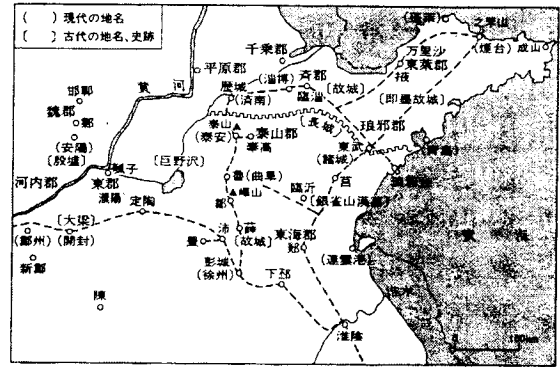
10日の朝、ホテルから岱廟まで行き、そこから泰山の登山を開始する。今回は、上り下りとも全ルート（約9km）を徒歩でゆく。岱廟から一天門、孔子登臨処、中天門（約5.5km、海拔847m）まで行き、ここで昼食。午後、南天門（約8km、海拔1460m）までの階段を登って、3時半ころに孔子廟近くのホテルに着く。泰山は、2000年7月にも中天門から登山したことがあるが、この時は激しい風雨で前後2～3m位しか見えず、南天門では降りることも登ることもできず、1時間ほど足止めされたことがある。ちょうど始皇帝が、暴風雨のため樹の下で休んで、その樹に五大夫の爵位を授けたという状況と同じようであった（『史記』秦始皇本紀）。登山道の傍らには、今も「五大夫の松」を伝えているが、階段はすっかり整備されて登りやすくなっていた。暗くなるまで、玉皇山頂（海拔1545m）と付近の摩崖碑などを参観。頂上で宿泊。夜はガスが少し晴れて、ホテルの部屋から泰安市の灯りがみえた。

11日は、6時半に起床して、近くまで歩いて日の出を参観。風が強くて寒かったが、一望すると、たしかに泰山の神秘観がうかがえる。午前、碧霞宮を参観して、それから下山する。南天門の展望台から、ロープウェイで参観する人々を眺めながら、ふたたび階段を下りて中天門で昼食。ここから一天門まで戻り、車でホテルに帰る。泰安泊。

12日は、午前バスで曲阜まで移動した。曲阜は、春秋時代の魯国故城で、いまでも城壁の一部が残っている。ここで孔子廟と孔林などを参観。午後、ふたたび長距離バスで臨沂に移動する。途中で費県の峠をこ

えて、臨沂市に到着。臨沂泊。

13日は、午前には漢墓竹簡博物館に行き、^{ぎんせきやく}銀雀山漢墓と竹簡を参観。そのあとバスで連雲港まで移動した。到着後は、すぐに市博物館に行く。ここでは^{いんわん}尹湾漢墓簡牘などを展示しており、そのうち「日記」とされる曆譜には、漢代東海郡の官吏であった人物が出張を記録している。前日に通過した曲阜－費県－臨沂の交通ルートは、その一部である。参観のあと連雲港の飛行場に向かい、夕方の便で上海に到着。上海泊。14日は上海市に滞在して、15日に上海から松山空港に帰国した。



(『司馬遷の旅』中公新書)

以上の日程に関連して、古代の交通ルートと泰山の関係を確認しておこう。古代の伝承は『史記』封禪書に総括されているが、その伝えによると、最初に泰山で封禪をしたのは帝王の舜である。ここでは『書経』舜典を引いて、舜が五嶽(泰山、^{こうざん}衡山、^{かざん}華山、^{こうざん}恒山、^{すうこう}嵩高山)を巡ったといい、二月に岱宗(泰山)を訪れている。その後、春秋時代には齊の桓公が封禪を行おうとした。この齊国の故城は、^{りんし}臨淄(淄博市)にあり、ここから歴城(済南市)を通って、泰安の方面に行くことになる。しかしこのときは、管仲が古の例(72人の王のうち、天命を受けた12人)をあげ、諫めて中止となっている。魯国では、陪臣の季氏が泰山をまつり、孔子が非難した記事がある。これに関連して『孟子』尽心上に、「孔子は東山に登りて魯を小とし、太山(泰山)に登りて天下を小とす」とある。

始皇帝の死後には、陳涉・呉広の乱をきっかけとして秦帝国は滅亡するが、このとき彭城(徐州)－^{山東省滕州市}薛(山東省滕州市)－魯(曲阜)の方面は、交通の要衝となっている。これは項羽と劉邦の楚漢戦争のときも同様である⁽³⁾。

また長江の北から淮水をこえて、黄河流域にいたる地域は、古来から経済的な交易の要衝であり(『史記』貨殖列伝)、漢代では東方に諸侯王の王国が置かれている。こうした商業に関係する商人や、王国の客も往来することになる。さらに前漢時代には、尹湾漢墓竹簡の竹簡「日記」に、官吏が出張するルートを記している⁽⁴⁾。この墓主は、東海郡(治所は郯県)の役人であったが、ここから下邳・徐州や、北の琅邪郡の方面に出張した。また郡の治所とは別に、交通・軍事の要衝となる費県に、副長官の都尉の役所が置かれたが、これは郯県－臨沂－費県－曲阜に行くルート上にある。今回、曲阜から費県を通って臨沂に行くとき、この場所を観察すると、ちょうど日本の峠にあたる所で、ここが交通の分岐点になることがよく理解できた。このほか東海郡では、県の官府と郵という施設が置かれており、これは行政文書をリレー式に伝達するルートである。

このように済南から泰安、泰山、曲阜からは、①東南の臨沂に行くルートと、②南の徐州に行くルート、③西の洛陽に行くルートがある。これらは春秋・戦国時代から秦漢時代にかけて、皇帝と官僚・官吏の往来や、諸侯王と客の往来、文書伝達、商業、軍隊や反乱軍の移動ルートとして使われたものである。しかし秦漢時代には、まだ一般人の泰山巡礼などはみられない。漢代の旅行については、さらに検討する必要がある。

2、泰山と皇帝の封禪

つぎに泰山と皇帝の封禪について、秦漢時代の様子を整理しておこう⁽⁵⁾。『史記』封禪書によれば、始皇帝の東方巡行では、齊の八神(天主、地主、兵主、陰主、陽主、月主、日主、四時主)を祭っており、このうち地主が泰山にあたる。これは統一秦が、齊国の祭祀を組み込もうとしていることになる。始皇帝の死後、二世皇帝は、東方沿岸部の碣石から泰山、会稽山に巡行して刻石に追記をしたという。泰山の刻石と追

記は、『史記』秦始皇本紀に収録され、二世皇帝の追記は岱廟のなかに一部が置かれている。

漢代では、文帝のときに封禪の議論があったが、天子の封禪を実施したのは武帝である。武帝は東方に巡行して、泰山の頂上に石を運び、元封元年（前110）に、嵩山から泰山をへて海上を巡ったあと、泰山にもどって封禪の儀式をおこなった。司馬遷は、武帝に遂行して『史記』封禪書を残したが、詳しい儀礼の実態は不明という。したがって始皇帝と武帝の封禪は、方士の影響をうけて、不死長生を願う呪術的な儀式であるともいわれる。

後漢時代に泰山で封禪したのは、光武帝、章帝、安帝である⁽⁶⁾。ここで興味深いのは、『後漢書』祭祀志上にみえる封禪である。光武帝は、建国して30年になって泰山に行き、建武32年（56）に漢の武帝が元封元年に行った故事を議論している。二月には石工を山に登らせて刻石して、いよいよ封禪を実行する。この注釈に、馬第伯の「封禪儀記」を引用しており、これは早い時期の見聞記である。その大意は、つぎの通りである。

皇帝の車駕は、正月二十八日に洛陽宮を出発して、二月九日に魯に到着。先に使者を遣わして人夫500人で泰山の道を補修させる。十日に、魯の孔氏宅で酒肉を賜る。十一日に出発して、十二日に奉高（泰安市）に宿泊。この日、また人夫1000人で道を修理。十五日に齋戒して、国家は太守の府舎に居り、諸王は居府中に居り、諸侯は県庭の中に在る。太尉と太常は、山嶽で齋戒する。ここで馬第伯が自ら言うに、まず儀礼に使う石を準備する様子などを見た。……その朝は騎馬に乗り、道が険しくなると馬を下りて牽き、騎乗したり歩いたりしながら、平地から20里（約8 km）の中覬（今の壺天閣）に至って馬をおく。ここから天関（中天門か）を仰ぎ見ると、まるで谷底から峰を仰ぎ、浮雲を見るようだ。天関に至ると、まだ10余里（約4 kmあまり）あるという。ここで岩と松の樹木（対松亭と十八盤の付近）をみて、ようやく天門の下に到着する。天門を仰ぐと、穴から天を見るように、あたりが開けてくる。さらに登ると、始皇帝の立石と、その北に武帝の立石がある。下山するとき、日が暮れて雨がふる。道が見えないので、前の人につづいて歩き、天門の下で夜になる。

これによると光武帝の封禪は、先に使者や石工たちを派遣して刻石し、官僚や官吏などを引き連れて登っている。ここでは始皇帝や漢武帝にみられたような呪術性よりは、より開かれた儀礼となっている様子がうかがえる。

その後、唐代には玄宗が開元13年（725）11月冬至に、泰山の封禪を行っている。金子修一氏によると、玄宗は開元11年から、前漢末に廃止された后土祠を復活し、宗廟の祭祀、郊祀まで一連の行事をおこなって、封禪に備えたとみなしている⁽⁷⁾。

また北宋時代には、大中祥符元年（1008）に行われた真宗の封禪が有名であり、このとき発見された像を安置して創建されたのが碧霞元君の廟である。これら唐代以降の史跡は、泰山の頂上や、ふもとの岱廟に残されている。

このような皇帝の封禪は、道家、儒家、陰陽五行家の思想を融合し、神仙を求める方士たちに活躍の場をあたえたともいわれる。しかしそれとは別に、古来からの山岳信仰や、後世の宗教的な信仰がある。

3、泰山の祭祀と信仰

泰山が世界遺産に登録されたあと、1990年、1991年に国際シンポジウムが開催されている⁽⁸⁾。その報告題目をみると、歴史と文化よりも、地質地貌、生態環境、植生と樹木、水文気象、建築芸術、人文と自然景観といった自然科学の研究が多い。これは泰山が、自然と神秘の名山であることを反映しており、こうした自然景観が崇拜につながっているのであろう。また会議の報告では、山神崇拜や、帝王の封禪、宗教、農民起義の歴史、観光資源の開発もとりあげられている。これらの宗教的な史跡と信仰も、泰山の大きな要素で

ある。ここでは中国古代の要素を、いくつかとりあげてみよう。

近年、湖北省荆州市の周家台30号秦墓で発見された竹簡に注目される記載がある⁽⁹⁾。それは病気の治癒に関する内容で、心を病むものは三たび禹歩（一種のステップ）をして、「敢えて泰山に告ぐ。泰山の高きは、人これに居り、……の孟なり。……」と言う。そのあと、すぐに両手を腹にかざして呪文を唱える。これは治癒神としての禹に関連して、泰山を信仰の対象とするものであろう⁽¹⁰⁾。

漢王朝のはじめには、高祖が功臣を分封するときの「封爵の誓い」が有名である。『史記』高祖功臣侯者年表の序文には、つぎのようにみえる⁽¹¹⁾。

使河如帶、泰山若厲、国以永寧、爰及苗裔。

黄河が帯の如くなり、泰山が厲ともしの如く（小さく）なっても、国は永く安寧で、これを苗裔に及ぼそう。

これは誓いの言葉に、泰山を譬えとして表現したものである。このように病気治癒の呪文や、誓いの中に「泰山」を引用するのは、ただ名山というほかに、靈験をもつという心情があるのかもしれない。

また『三国志』魏書、烏丸伝の裴氏の注に引く『魏書』（『後漢書』烏桓列伝も、ほぼ同じ）にも、泰山に関する記載がある。それは烏桓の人が亡くなったとき、生前の馬や衣物・服飾などを焼いて送るのであるが、このとき犬と一緒に繋いでいる。それは犬が、死者の神霊を護って赤山に帰らせるためである。ここで赤山は遼東の西北数千里にあるといい、中国の習俗と比べている。

赤山在遼東西北數千里、如中國人以死之魂神歸泰山也。

……これは中国の人が、死者の靈魂を泰山に帰すようなものである。

つまり三国時代までには、死者の靈魂が、遠く山東の泰山に帰ると信じられていたことがわかる。これも泰山の信仰が、全国に広がる一つの形態を示唆するものであろう。

このほか泰山の神と信仰では、東嶽大帝と碧霞元君が代表である⁽¹²⁾。また自然石に「石敢当」と書いて厄除けのお守りとする石敢当の習俗がある。

東嶽大帝は、起源に不明な点があるが、その神は病気を治癒する能力が認められたという。唐代には帝王となって人格化し、のちに東嶽大帝を祀る岱廟が建設された。泰山の上には泰山上廟があり、元代に修復されている。この東嶽大帝に関して、各地に設けられた東嶽廟の分布が注目される。水越知氏によると、東嶽廟は、宋代以降に華北地方の信仰から、江南をふくむ全国的な民間祭祀として広がったと指摘されている⁽¹³⁾。これによって泰山の神は、巡礼によって訪れることができない人々にも、各地の東嶽廟で祈ることができるようになったという。

もう一つは、碧霞元君（泰山奶奶）の碧霞祠である。これは宋代に創建され、明代には、すでに万能の女神になったという。いま碧霞宮には、正面と両脇に碧霞元君の像が置かれている。両脇の像は、それぞれ子授けと眼病の神を表している。そして毎年、正月から4月には人々が押し寄せて幸福を願っている。

このように泰山の信仰は、地方の山岳崇拜から、泰山の神（東嶽大帝）、道教の碧霞元君を信仰する人々によって、今日にいたるまでつづいている。

ところで私は、泰山から下山するとき膝を痛めて、ゆっくりと降っていたが、傍らで両側から抱きかかえられて歩く若い女性に出会った。あとで気がついたのは、この女性は眼が見えず、支えていたのは母親と連れの女性だったということである。健康な人でも、多くの観光客はロープウェイを使って簡単に参観する時代に、一天門までのルートを不自由な体で歩くのは、よほどの信念であると感じた。顧みれば碧霞元君は、子授けの神であると共に、眼病に靈験をもつ神である。現在に生きている泰山信仰の一端を目の当たりにして、女性の眼が回復することを願わずにはいられなかった。こうした現代につながる史跡と信仰が、泰山の価値を高めている。

おわりにー封禪と泰山信仰

山東省の泰山は、皇帝から庶民にいたるまで、様々な信仰と多くの史跡を残している。その周辺は、秦漢時代では、皇帝と官僚・官吏たちの往来、行政文書の伝達、交易と商業、戦争と叛乱による人々の往来などの交通ルートにあった。また秦漢時代には、泰山を呪文や誓いの対象とし、死者の霊魂が帰る名山という認識もみえている。ただし漢代までは、庶民の泰山信仰は、まだ各地には広がっていない。これは漢代から唐代まで、庶民が本籍を離れて、自由に旅行ができないことに関連するとおもわれる。

宋代より以降は、しだいに東嶽大帝や碧霞元君の信仰が盛んになっている。とくに東嶽廟は、宋代には華北の信仰をこえて全国的に広がり、お守りでも救われる信仰を伝えるといわれる。これによって人々は、泰山に巡礼するほかに、各地の城市で参拝することができることになる。また碧霞元君の信仰は、今日でも泰山の主な対象となっている。

このように泰山は、歴史の史跡を多く残し、今では世界的な観光の対象となっている。今回の調査では、中国古代の交通と信仰について調べてみたが、皇帝の封禪や交通・人々の信仰は、あらためて大切な問題であることが実感できた。

注

- (1) 伝説の封禪書と、始皇帝・武帝の封禪は、『史記』封禪書（『漢書』郊祀志の前半）にみえている。小竹文夫・小竹武夫訳『史記』全8冊（ちくま学芸文庫、1995年）、野口定男ほか訳『史記』中国古典文学大系（平凡社、1968年）、班固、狩野直禎・西脇常記訳注『漢書郊祀志』（平凡社東洋文庫、1987年）、藤田勝久『司馬遷の旅』（中公新書、2003年）など。
- (2) 泰山の信仰は、シャヴァンヌ著、菊池章太訳『泰山ー中国人の信仰』（勉誠出版、2001年）に現地調査をふまえた記述と、劉慧『泰山宗教研究』（文物出版社、1994年）の考察がある。路宗元編著『文化泰山』（泰安市新聞出版局、1996年）は、関連資料の紹介と、1987年に世界遺産に登録されてからの学会記録や動向を収録している。
- (3) 藤田勝久『項羽と劉邦の時代』（講談社、2006年）。
- (4) 連雲港市博物館ほか『尹湾漢墓簡牘』（中華書局、1997年）、藤田勝久「秦漢時代の交通と情報伝達」（『愛媛大学法文学部論集』人文学科編24、2008年）。
- (5) 鶴間和幸「秦帝国の形成と東方世界ー始皇帝の東方巡狩経路の調査をふまえて」（『茨城大学教養部紀要』25、1993年）、同『秦の始皇帝ー伝説と史実のはざま』（吉川弘文館、2001年）、吉川幸次郎『漢の武帝』（岩波新書、1949年）、藤田勝久『司馬遷とその時代』（東京大学出版会、2001年）など。
- (6) 大櫛敦弘「後漢時代の行幸」（『高知大学人文学部人間文化学科・人文学科研究』7、2000年）。
- (7) 金子修一『古代中国と皇帝祭祀』第三章「漢代の郊祀と宗廟と明堂及び封禪」、第七章「唐代皇帝祭祀の二つの事例」（汲古書院、2001年）。
- (8) 前掲『文化泰山』213～241頁。
- (9) 湖北省荆州市周梁玉橋遺址博物館編『閔沮秦漢墓簡牘』（中華書局、2001年）。
- (10) 工藤元男「禹の変容と五祀」（『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社、1998年）。
- (11) 李開元『漢帝国の成立と劉邦集団』213～216頁。
- (12) 前掲シャヴァンヌ著『泰山』、前掲『泰山宗教研究』など。
- (13) 水越知「宋元時代の東嶽廟ー地域社会の中核的信仰として」（『史林』86-5、2003年）。